

## 千里山賛歌

二十一回生 大久保 千尋

臉を閉じると、むせ返る様な緑の匂い、何処までも連なるなだらかな丘陵と竹藪、白い砂の坂道。そこには若い両親や幼い弟、知的でお洒落な知り合いの人達が今も元気で生き生きと暮らしている。あの眩しい青空も鳥のさえずりさえも、今はもう記憶の中でしか存在しないと思うとただ感無量である。

私の家は千里山の最北、上の噴水から坂を上り切った処にあった。両親は自然がすぐ傍にある住宅地を随分探して決めたらしい。家の裏は竹藪、夜明けと共に一斉に始まる雀たちのけたたましいさえずりに目を覚まし夕暮れには竹藪に返った雀たちが喋り疲れ夢路に就くまでさえずりは続く。まさしく竹藪は雀のお宿だった。

竹藪には藪鶯、百舌鳥、メジロ、梟そして名の知らない小鳥も棲んでいた。西向きの窓からは遙か彼方に箕面の山々が眺められ四季の移ろいを伝えてくれた。山は近くなったり、遠くかすんだり、夕映えに茜色の衣をまとったり、雪化粧してみたり、刻々と変わりゆく自然の表情を楽しませてくれた。天気予報のないその頃、山にかかる雲の様子で翌日の天気を予想し、テルテル坊主に懸命にお願いした事も幾度かあった。

お向えは同期生の松本進ちゃんのお家だ。家の左隣が「阪急の農園」、といっても我が家と農園の間には進ちゃんの家の広い土地があった。夏になると黄色い房の花を咲かせる背の高い雑草が一面に茂り、風が創り出す黄金色の大きな波と怒濤の上をヤンマ、オニヤンマは悠然と飛び、夏も終わりを告げる頃になると赤トンボが群れをなして飛び交っていた。「トンボボーエ、トンボボーエ」と、竿を振り回しながらトンボを追う子供達の掛け声は今も千里山の何処かで聞く事が出来るのであろうか。

農園は旧千里山遊園地（現 関大前）で春は花人形、秋は菊人形の催しのための花を栽培していたと聞いている。

農園の管理には幾人かの人が替わったが、忘れてたいのは白髪交じりの長い眉のお爺さんだ。

背中に「鯉の滝登り」の彫り物があつた。洗いざらしの浴衣で作ったシャツを着ていたけれど働き者で澄んだ目の優しい人だった。

子供たちはお爺さんの事が大好きだったと思う、何時も誰かが傍にいた。

「凄いで！お爺さんの背中の鯉が本当に滝を昇るんだぞ！」誰かが云った。

この話は瞬く間に広がり「鯉の滝登り」が見たくつてお爺さんの元にみんな駆け寄った。

お爺さんは面倒がらずに浴衣のシャツをおもむろに脱ぎ子供たちに背を向けた。

「よく見ろよ」と無言で言わんばかりに肩甲骨を開いたり窄めたりすると、鯉はまるで生きていたかのようにお爺さんの背中の滝を昇って行った。

「この鯉はネ、親不孝の塊なんだ、こんな鯉を決して背中に背負ってはいけないよ」。

自分自身に云っているのか、子供たちに聞かせているのか日焼けした波打つ背中は淋しげだった。農園の事務所の前から足場の悪い階段を下りていくと二つの丘陵の谷間になる。

階段の途中に檻があり気の強い七面鳥と狸、美人の狐が飼われていた。

「この狐はネ夜になるとお化粧をするんだよ」。いたずらっ子のように長い眉の奥にあるお爺さんの灰色の眸がキラリと光った。

北向きの丘陵は桃畑、南向きの丘陵は四季色とりどりの花が咲いていた。

その中でも日本ではまだ馴染みの薄いアネモネはモダンで可愛らしく何処か遠い国のおとぎ話が聞こえてくる様で大好きな花だった。

或る年、花人形の会場での髭のある武将の鎧にアネモネが使われているのを見て凄くショックを受けた事があつた。

二つの丘陵の谷間を真っ直ぐに下に進み正面の竹藪を左に折れると通称「ポテン池」と呼ばれる池が

阪急農園をバックに父が撮った写真（昭和25年）  
母と弟と一緒に



↑竹藪の向こうにキラキラ光る大阪湾が見える

左手にバラックの様な事務所、細い道に通じる階段があった。

前の白い道は吹田一中へ通じる、私たちの家族の立つ後ろ下には気の強い七面鳥と狸、狐の檻がある。  
谷間の細い道を下り左へ曲るとボテン池。白く咲いている花、母が手にしている花も白い野バラです。

あった。名前の由来は知らない。  
菱の実や魚がいっぱい獲れる沼の様な池だった。  
「ボテン池」の一段下がった処に「蓮池」があったが  
地形の関係だろう、「ボテン池」は子供達のお気に入り  
で休日になると小さな太公望が池の周りを囲  
んだ。  
マヨネーズや佃煮の空き瓶に当時配給されていた  
ナンバ粉と水を入れ瓶の口を麻縄で縛り池に投げ  
込んで置くと翌朝瓶の中はタナゴで一杯になつて  
いた。  
上から見ると普通の魚、横から眺めるタナゴはメ  
タリックな虹色に輝き金魚より躍動的で遙かに美  
しかった。

農園の道路を越えたお向えが「ラクダ山」。  
「ラクダ山」は子供の遊びのあらゆる想像力を駆り  
立てる宝庫であった。  
展望台、砂場、飛び降り場、秘密のお花畑、寶石  
の壁、自分流のお好みの名前を付け、崖を藁をた  
よりによじ登り、飛び降り、子供のエネルギーを  
爆発させるかのように縦横無尽に駆け巡った。  
「ラクダ山」の一番高いところを「展望台」時には「見

張り台」と呼び、此所からは「大阪城」が確認出来  
た。  
遠く霞んで小さくしか見えない「大阪城」だったけ  
れど威風堂々と確かな存在感を示していた。  
「大阪城」から目を右に移すと果てしなく続く竹  
藪の先にキラキラと光る銀色の一筋の線が見える。  
大阪湾の海の光だ。

大阪大空襲の折、海の光の方角にいつまでも消え  
ない炎、空高く立ち昇る煙、逃げ惑う人々の声が  
時折風に乗って「ワアーッ！ ワアーッ！」と歓声に  
も似た声となつて聞こえて来た。

爆風で舞い上がった半焼けになったさまさまな物  
が空から点々と降ってきた。その後、煤の交じつ  
た雨が夕立の様に必ず降った。  
あの炎と煙の下でどんな光景が繰り広げられてい  
たのか。

小さな焼け焦げたゴムの長靴が降ってきた時、こ  
の靴を履いていた子は無事であったろうかと見も  
知らぬ児の身を案じ心配で幾夜も眠れなかった。

「宝石の壁」、実はただの石ころだけど赤、緑、  
半透明等と角の取れた美しい石の層があり私はそ

う呼んでいた。大人になったらお母さんに此所の  
石で素敵な首飾りを作つてあげようと決めていた。  
「ラクダ山」はその後削り取られて平地になった。  
何日も「ラクダ山」を削り取るブルドーザーの音が  
悲しく胸に響いた。  
やり場のない切ない感情を抑えながら消えゆく「ラ  
クダ山」をただ見つめていた。

上の噴水の坂を上がつて来る道と我が家の前の道  
が合流して吹一中へ向かう下り坂となる三叉路は、  
近所の子供立ちのチョットしたイベント広場だつ  
た。

夏の夕方、お風呂や食事をすませると各自花火を  
持ち寄つて花火大会をした。子供たちが三三五五  
に集まってくる頃、月は昇り始める。

すると何処からともなく蝙蝠の群れが現れて上空  
を旋回する。

宵の空を掻き混ぜる様に乱舞しやがて何処かに退  
場すると、月はすでに高く紺碧の空は満天の星が  
煌き天の川がゆつたりと流れていた。

花火の最後のお決まりはお線香花火、年長者のお



隣のお兄ちゃんは火の始末をした後星座の事をよく話してくれた。  
時折流れ星が夜空を駆け抜けていった。

吹一中に向かう下り坂の両側に月見草が一夜限りの大輪の花を咲かせていた。淡い黄色の花は紺碧の空に例えようもなく美しく映え、しかも儂げであつた。

お向かえの進ちゃんが大好きな女の子に月見草の花を摘んでプレゼントしていたと云う話を聞いた。一夜しか咲かない儂い月見草、早く届けないと萎んでしまう。

花は美しいまま無事に届けられたのかしら？

でも、ナントテ素敵な事を思いついたのでしよう。女の子も市松人形のように美しいお嬢さんでした。

戦前戦後を挟んで歴史的な日本の激動の時代を自然に恵まれ、良き人々に巡り会えた「千里山」の何と愛しい事か。

そうそう、あの坂道は月見草ばかりではなく野生の白いつる薔薇が何時も甘い香りを漂わせていました。